

常染色体優性

多発性のう胞腎

をご存知ですか？

監修：医療法人 積仁会 島田総合病院 循環器科・腎臓内科 表 敬介 先生



腎臓にのう胞が多数できる病気です

- 常染色体優性多発性のう胞腎 (ADPKD) は、腎臓にのう胞 (尿の貯留した袋) が多数でき、徐々に大きくなることで腎機能が低下していく遺伝性の病気です。
- 70歳までに半数の方で人工透析が必要になるといわれています。
- 30～40歳代頃までは、ほとんど症状があらわれないことが多いですが、のう胞が大きくなるにつれて、お腹のまわりが太くなり、痛みや血尿、尿路結石やのう胞の感染症などがあらわれることがあります。

検査・診断は比較的簡単です

- ADPKDは、遺伝するタイプの腎臓病としては最も多い病気で、国内に約4,000人に1人の割合で患者さんがいると推定されています。
- ADPKDの診断は、家族歴と画像検査が重要です。
- ADPKDと診断された患者さんの家族も画像検査を行うことができます。



ADPKDは 難病医療費助成制度の対象疾患です

- 平成27年から、難病患者さんへの医療費助成制度が変わり、ADPKDが新たに助成の対象となりました。
- ADPKDの治療では、腎機能の低下を抑えるために、降圧療法や食事療法などが行われます。
- 最近、のう胞の増大に対するアプローチができるようになりました。

まずはかかりつけの医師へご相談下さい

